

欧州金融機関における 流動性リスク管理高度化への取組み

金融危機を背景に重要性の高まる流動性リスク管理について、短期的な目的と中長期的な目的のそれぞれに対応した適切な管理フレームを構築することが重要である。また、流動性ストレス・テストについて、資産と負債の特徴を考慮したシナリオ設定に工夫が求められる。

今回の金融危機を背景に流動性リスク管理の重要性が従来以上に、規制当局や金融機関に認識されることとなった。流動性リスク¹⁾管理の目的は、現在および将来にわたるキャッシュフローの履行義務を達成し、突発的な経営危機（サドン・デス）を回避することである。このようなサドン・デス回避にあたり、そもそも流動性バッファの水準が適切であったか、流動性バッファを想定する時間間隔（生存期間）が適切であったかということが、多くの金融機関のリスク管理担当者の問題意識となった。

流動性リスク管理は、個別銀行や市場全体に関わる状況によって、現在から将来にかけ、資産および負債で動的にキャッシュフローの状況が変化中、どのような流動性需要が発生し、その需要に対してどのような対応が可能かを把握できるものでなければならない。

本稿では、このような枠組みを実際に導入している欧州の金融機関の事例を紹介することとしたい。

欧州金融機関における 目的に応じた流動性リスク管理

デンマークの大手銀行であるダンスク銀行では、期間と目的に応じて流動性リスク管理手法を使いわけること、4つの柱に基づく管理体制を構築した（図表1）。ダンスク銀行のユニークな点は、短期3週間から長期では10年にも及ぶ、幅広い期間の概念で流動性リスク管理を行っている点と、これらの情報をグループ全体にまたがって一元的に管理できるようなITプラットフォームを構築した点にある。

短期的な流動性バッファの管理では、3週間という短期間での流動性ポジションを確保すべく、流動性レシオなどの比率分析に基づいた体制をとっている（オペレーショナル流動性）。グループ全体の流動性について、実際に生じたか生じることが確実視されるイベントに関連して、既存取引の約定ベースでのキャッシュフロー（将来の受取・支払）を計算し、流動性バッファ

図表 ダンスク銀行の流動性リスク管理フレームワーク

	オペレーショナル流動性	ストレス・テスト	翌12ヶ月流動性	構造的流動性
期間	3週間	6ヶ月	13ヶ月	10年間
目的	銀行が短期的に正の流動性ポジションを持っていることを確実にする（ 短期的な流動性バッファの確保 ）	潜在的な流動性ギャップを、種々のストレス・シナリオに基づいて定量化し、流動性ギャップを解消する方法を特定 格下げコストの定量化 緊急時には、コストより時間を優先	銀行が、 12ヶ月先 まで、正の流動性ポジションを持っているかどうかの確認	• 長期的流動性プランニングへのインプット • 流動性リスクに基づくALM業務への貢献 （バランス・シート構築等）
手法	ギャップ分析/流動性レシオ	シナリオ分析	ギャップ分析	ギャップ分析
前提	•既存取引の資金の入出を予測 •換金性の高い債券（国債等）は売却可能と想定、またレポ取引の活用も考慮 •流動性バックアップファシリティの活用も想定	•バランスシート全体を対象 •満期資産からの流動性流出は存在しない、また 貸出サイドは変化無しと想定 •負債サイドのリファイナンス率はシナリオ毎に設定	• 資本市場へのアクセスが絶たれる •満期到来預金はロールオーバー、但し、 その他負債性調達のリファイナンス率はゼロと想定 •事業活動レベルは徐々に減少	•既存取引の資金の入出を予測
管理方法	限度枠（ハードリミット）	コンティンジェンシープラン	限度枠（ソフトリミット）	限度枠（ソフトリミット）

（出所）RiskCapital 2009（2009年7月 ブリュッセル）でのプレゼン資料よりNRIヨーロッパ作成

NOTE

- 1) 流動性リスクには、資金流動性リスクと市場流動性リスクが存在するが、本稿では資金流動性リスクを想定する。
- 2) ハードリミットとは、そのリミットを越えた場合には、直ちにリスクを削減するような行動（ポジション調整や売却等）をとらなければならないものを意味する。一方、ソフトリミットは、そのリミットを越えた場合に、銀行内部でどのような行動をとるべきかに関する議論を行うことを要求しており、必ずしも直ちに何らかの金融取引を行う必要は意味しない。
- 3) ストレス・テストとは、流動性リスクが顕在化するような種々の状況（ストレス）を想定し、このストレス下での資金流動性ギャップを定量化するという分析手法

確保を判断する。指標は単純な流動性レシオを用い限度枠も明確な基準（ハードリミット²⁾）を設定している。ダンスク銀行では、このオペレーショナル流動性管理を支えるため、グループ全体にまたがる単一キャッシュフロー・データベースをインハウスで構築した。

種々の制約条件を考慮した ストレス・テスト

中期的な期間（6ヶ月）での流動性については、ストレス・テスト³⁾を行っている。流動性リスク管理で重要性の高いストレス・テストであるが、種々のストレス状況にたいして、流動性ギャップがどの程度存在し、どのように解消できるか、という検討を行うため、前提やシナリオの設定に工夫が求められる。ダンスク銀行では、負債サイドの資本市場調達について、債務が無担保か有担保か、調達形態（コマーシャル・ペーパー、メディアム・ターム・ノートなど）、調達先種類（事業法人、銀行、中央銀行等）などの条件設定に基づきシナリオを設定している。また預金調達については、個人預金か法人預金か、預金引出しの可能性が高い顧客かどうか、定期性預金か非定期性預金か、などの条件を考慮している。一方、資産サイドについてはストレス下でも事業は継続するという前提で、貸出活動は継続、流動性資産は換金やレポ取引を行う、クレジット・ラインの潜在的流動性要求は考慮に入れるなどの前提をおいている。

また、シナリオ設定におけるストレスの強さについては、銀行固有のストレスと市場全体のストレスの双方で2つのレベル（厳・緩）を設定し、かつ、両者の組み合わせ（複合シナリオ）も想定している。当該銀行では、銀行固有のストレスと市場全体のストレスのシナリオを

単純に合算した流動性低下のレベルに比べ、複合シナリオによる流動性低下レベルが著しく大きいことも分析により明らかにしており、複合シナリオの重要性が高いと判断している。

流動性リスク管理の高度化に向けた 組織風土とITインフラ

さらに、ダンスク銀行では、1～10年という長期的な期間について、バランスシートを長期的にどのように構築し流動性リスクへの耐性を高めるかという長期的・戦略的な考察を行い、流動性リスク管理を幅広い期間の概念で捉えるという試みを行っている。

ダンスク銀行の先進的な点は、上記述べた4つの柱で流動性管理を行っている点、包括的な流動性リスク管理を可能にするITプラットフォームを構築した点にある。当行が、このような高度な流動性リスク管理体制を整えてきた背景として、99年にノルウェーの銀行を買収したことで、規制の厳しいノルウェーのレベルに流動性リスク管理の水準を合わせたという点が指摘されている。また、そもそも伝統的に流動性リスク管理に対する経営層の問題意識が高いことも指摘されている。グローバルに流動性リスク管理への規制要求レベルが高まる中、金融機関にとって、今後も経営課題として組織全体にまたがった包括的な取組みを進めていくことが必要だろう。■

Writer's Profile



高村 幸治 Koji Takamura

NRIヨーロッパ
上席コンサルタント
専門は金融機関事業戦略
focus@nri.co.jp